KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

メディアで使用される言語の特徴：ニュースの娯楽番組化の影響について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部 公開日: 2024-03-18 キーワード (Ja): 映像メディア, ニュース, 娯楽番組, 要点後置, 複数人による発話 キーワード (En): 作成者: 轟, 里香 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学
URL	https://doi.org/10.18956/0002000154

関西外国語大学 研究論集 第119号（2024年３月）
Journal of Inquiry and Research, No.119（March 2024）

メディアで使用される言語の特徴

── ニュースの娯楽番組化の影響について ──

轟　　里　香

要　旨

本稿では、近年の映像メディアにおける言語の特徴、特に、いわゆるニュース番組で使用されている言語に関わる現象について論じる。近年のメディアにおける言語には、従来見られなかったような現象が生じている。本稿で取り上げる言語現象は、ニュースにおいて重要な点が後ろに動かされていること、および、会話が行われていることである。本稿では、このような言語現象を引き起こしているのは、ニュースの娯楽番組化であるということを主張する。また、ニュースに要求される事柄から見て、このような言語の手法の使用には問題があることを指摘する。

キーワード：映像メディア、ニュース、娯楽番組、要点後置、複数人による発話

１．導入

本稿では、近年のメディアにおける言語の特徴、特に、いわゆるニュース番組[1)]で使用されている言語に関わる現象について論じる。近年のメディアにおける言語には、従来見られなかった現象が生じている。本稿では、このような言語現象を引き起こしている要因を指摘する。

本稿で取り上げる言語現象は、ニュースにおいて重要な点が後ろに動かされていること、および、会話が行われていることである。本稿では、このようなニュースの言語の特徴が、ニュース番組の娯楽化によって引き起こされているということを主張する。また、ニュースに要求される事柄から見て、このような言語の手法の使用には問題があることを指摘する。

本稿の構成は、次のようなものである。２節では、ニュースの娯楽番組化が一般的にどのような形で現れているかを述べる。３節では、ニュース番組の言語に関する現象を見る。４節では、ニュース番組で娯楽番組の手法を取り入れることの目的とされているのは何なのかを考察する。５節では、ニュースの娯楽化の問題点を、言語や情報伝達に関連した点から示す。６節では本稿の議論のまとめを行う。

２．ニュースの娯楽番組化の例

ニュース番組で使用されている言語について考察する前に、この節では、ニュースの娯楽番組化が一般的にどのような形で現れているかを見る。

ニュースの娯楽番組化は、かなり以前から行われていることが指摘されている。ニュースの娯楽化に関連して、林（2002）はマスメディア / ジャーナリズムの「タブロイダイゼーション」について論じている。「タブロイダイゼーション」とは、「具体的には、とくに1980年代以降、マスメディアが生産する新聞記事や放送番組において、その内容がビジュアル化、あるいは娯楽化へ急激にシフトしてきたことや、さらに記事やナレーション部分が極端に圧縮されてきた現象である。」（林 2002: 38）

加来（2007）は次のように述べている。「ワイドショーが硬派な政治問題や国際情勢なども扱うようになり、脱芸能化も果たした。逆に、ニュース番組には娯楽要素が盛り込まれ、ショー化も進み、両者の境界はどんどんあいまいになってきている。」

このような、ニュース番組の娯楽番組化が行われる具体的な手法を見てみよう。

現在、多くのテレビ番組で、「ワイプ」という手法が多用されている。これは、テレビ画面の隅に、小窓のように他の画面が入り、そこに出演者の顔が映し出されるというものである。この手法が、ニュース番組でも用いられるようになっている。これはNHKのニュースでもかなり前から生じている。一例として、2017年12月29日に放送された「ニュース７」では、年末の各地の話題という映像で、テレビ画面の隅に小窓のように他の画面が入り、そこにアナウンサーの顔が映っている。このことは、映像面での効果だけではなく、言語的な現象ともみなせるが、後の節でこの点について考察する。

ニュース番組の娯楽番組化が、出演者によって示されている場合もある。従来、ニュース番組に出演するのは、アナウンサーや記者、解説委員などの肩書の人々であった。これに対し、娯楽番組に出演することが多いタレントが、ニュース番組に出演することが生じている。後述するように、タレントがニュース番組のキャスターを務めていることもある。NHKのニュースでは、タレントが常時出演するということは今のところないようだが、ゲスト的に出演している例は既にみられる。例えば、2020年１月13日（成人の日）の「ニュース７」において、パラリンピック選手のニュースの項目で、タレントが和服姿でスタジオに登場し、その後、パラリンピック選手に関するレポートを行った、という例がある。

ニュースと娯楽番組の境があいまいになっている他の例として、ニュースのような形式をとった娯楽番組というものも出現している。NHKEテレ[2)]で放送している「ワルイコあつまれ」[3)]は、かつて絶大な人気グループであったSMAPの元メンバーが中心出演者となって制作されている番組である。2023年現在毎週放送されているが、その特別版である「ワルイコあつ

まれ秋の大感謝祭SP」（NHKEテレ、2022年10月29日放送）でとられた形式について見てみよう。これは、いくつかのコーナーからなっていたが、そのコーナーの区切りで次のコーナーを紹介するときに、それがあたかもニュースの項目の紹介のように行われていた。それを読むアナウンサー役がタレントであったならば、単にニュースを模している娯楽番組、という印象になったであろう。しかし、アナウンサー役はタレントでなく、NHKの主要なニュースを通常扱っている本物のアナウンサーであったことは、注目に値する。つまり、この番組は、娯楽番組とニュースが極めて渾然一体となったものであったことになる。まさに、加来（2007）が述べる、両者の境界があいまいになっていることを示す例と言える。

このように、ニュース番組の娯楽番組化は、多くの手法で行われている。一方、ニュース番組で用いられる言語には、これまで見られなかった現象がみられる。そのようなメディアの言語の特徴は、ニュース番組の娯楽番組化の手法の一つである。次節では、ニュース番組で使われる言語の特徴と、それらがニュース番組の娯楽番組化の手法として行われていると言えるのはなぜかという点について述べる。

3．ニュース番組の言語に関する現象

3.1 要点後置

言語に関する娯楽番組的な手法として、重要な点を後ろのほうに動かす、というものがある。（これを、要点後置と呼ぶことにする。）これは、談話のレベルで、要点を後のほうで述べる、という形をとる場合もある。談話レベルでの要点後置は、かなり以前に生じていることが確認できる。そのような例では、談話の要点がかなり後にならないと述べられない。

（1）さて今日から新しい年度が始まります。ちょっとこれをご覧ください。これは今日から各銀行が一斉に売り出しました宝くじ付きの定期預金です。でまあ、思わず手に入る百両と、これは春から縁起がいいわいと言いたいところなんですけれども、一千万円に当たる確率というのは実に30万分の１ということですけれども、それでも出足はなかなか好調のようでした。この辺にもインフレに苦しむ国民のささやかないわば夢が秘められているという気がいたします。狂乱物価とか物価の鬼とか呼ばれておりますインフレは、今日の年度替りで一体正気づくのか、それともかえって加速していくのか、ここらへんの物価と暮らしの関わり合いについて、経済部の大山記者に東京都内を実感的なリポートをしてもらいました。

（「ニュースセンター９時」NHK、1974年４月１日放送）

（轟 2015: 47-48）

(1) は、あるニュース項目の冒頭に述べられたものであるが、このニュース項目が何についてのものなのかを示しているのは下線部である。この下線部は、かなり後にならないと出てこない。このように、談話の構造として要点が後置されることは、1970年代にはすでにニュースにおいて出現していることが分かる。

このような、談話の構造としての要点後置は、娯楽番組でしばしば取られる手法である。この手法がとられる典型的な番組として、クイズ番組が挙げられる。クイズ番組では、クイズが先に来て、重要な点をクイズの答え、という形で後で述べることになる。このような形式が用いられるのは、番組全体がクイズ番組の場合だけではなく、他の多くの番組でも、クイズの形式が挿入されているのが観察される。

また、要点後置はドラマでもしばしばみられる。推理ドラマでは、多くの場合犯人やその手口が後になるまで明らかにされない。他のジャンルのドラマでも、重要な点に謎があって、それが後で明らかにされる、というストーリー構成がしばしばとられる。

このように、娯楽番組では、談話レベルの要点後置が多く行われている。このような手法が、(1) のようなニュース番組でも取られている。すなわち、要点後置は、ニュースを娯楽番組化する手法であると言える。

要点後置は談話レベルで行われているだけではない。ニュースにおいて使用される言語を文単位で見てみると、文レベルでも要点後置が行われている場合があることが分かる。これは、日本語の言語的特性を利用して、要点を後ろに動かすものである。そのような方法の２つを挙げる。一つは、長い修飾語句が付いた名詞句を、文の代わりに用いる、という方法である。

(2) 福井県あわら市にある温泉施設で検出された基準値のおよそ2300倍の「レジオネラ属菌」。
（テレビ朝日系（ANN）「“レジオネラ属菌”2300倍検出で温泉施設が営業休止　家庭でも注意！医師解説」2023年９月28日、2023年10月11日アクセス[4)]）

(3) 福井県あわら市にある温泉施設で、「レジオネラ属菌」が基準値のおよそ2300倍検出された。

(2) は、(3) のような文の代わりに、修飾語句がついた名詞句が用いられており、結果として、いわゆる「体言止め」となる。（ここからは、このような例を「体言止め」と呼ぶことにする。）

体言止めを使うことの効果としては、一般的に語調などが考えられるが、体言止めの効果は、それだけではない。日本語は、英語などとは異なり、句の主要部が句の末端に来る言語である。したがって、名詞句においても、名詞が句の末端に来ることになる。名詞は語彙的要素であり、要点である場合が多い。つまり、修飾語句を伴う名詞句を文の代わりに用いると、名詞が後ろに動かされ、結果として要点が後置されることになる。特に、ニュース項目の冒頭で体言止めを用いると、そのニュース項目が何についてのものかが、その表現の最後に来ることになる。

上の、名詞句を使った（2）と文を使った（3）を比較すると、要点である「レジオネラ属菌」が、（2）では最後に来ており、要点後置となっていることが分かる。

文レベルで要点後置を行う別の方法は、分裂文を用いることである。分裂文とは、学校文法で強調構文と呼ばれるもので、次のようなものである。

（4） a. 太郎が最近興味を持っているのは、パソコン通信だ。
b. It was perfume that Mary bought in France.

（高見 1999: 146）

高見（1999）によれば、これらの文では、下線部の位置が焦点要素、すなわち話し手が最も伝達したい部分であり、通例文強勢（アクセント）が置かれる。これは、焦点が文のどの要素であるかを示すことができる構文である。すなわち、分裂文を用いる話し手は、文のいずれかの要素を強調する目的でこの構文を使うということになる。

轟（2023）は、分裂文を用いることが要点後置を行うことになると指摘している。（4a）と次の（5）を比較すると、日本語の分裂文では、英語とは異なり下線部が後ろに動かされる。

（5）太郎は最近パソコン通信に興味を持っている。 （轟 2023: 100）

下線部は焦点要素、すなわち話し手が最も伝達したい部分であり、文の要点と言うことができる。これが後ろに動かされるということは、要点後置となる。このように、日本語で分裂文を用いることは、日本語の特性から要点後置となる。このような分裂文が、ニュースでしばしば見られる。

（6）今回の中国共産党大会で、習近平国家主席が改めて強調したのは、（映像と音声）台湾統一の方針です。

（「ニュースウォッチ９」NHK、2022年10月17日放送）

（7）今回の中国共産党大会で、習近平国家主席は台湾統一の方針を改めて強調しました。

（6）と（7）を比較すると、（6）では下線部が後ろに動かされている[5)]。

このように、文レベルで見ても、体言止めや分裂文を用いることにより、ニュースにおいてしばしば要点後置が行われている。談話レベルで行われる要点後置と同じく、文レベルの要点後置も、クイズのように重要な点を後で示すことにより、ニュースを娯楽番組化する手法とみなすことができる。

ここまで述べた例は、音声言語に現れたものであるが、テレビニュースで使われるのは音声言語だけではない。テレビは映像と音声が組み合わさっているが、ニュースで用いられる文字言語においても、要点後置がみられる。このことについて、ニュースの項目を示す見出しとして画面に現れる文字表現を見てみよう。これは、ニュース番組の冒頭において一覧で示されたり、項目が代わった際に、画面下に表示されたりするものである。少ない文字数で内容を表し、一見、新聞紙面の見出しのように見える。しかし、テレビニュースの見出しと新聞の見出しとには大きな違いがある。これを実例から見てみよう。

(8) 米大統領選全州で勝敗判明　　(朝日新聞 2020年11月15日 1 面、轟 2020: 49)

この例では、記事の内容の「米大統領選が全州で勝敗が判明した」のうち、下線部の助詞や屈折語尾が省略されているとみることができる。このような要素を新聞の見出しで省略するのは、スペースの問題から限られた文字数で内容を表すためである。

これに対し、以下のようなテレビニュースの見出しは、助詞や屈折語尾以外の重要な要素の省略を含んでいる。

(9) 接待伴う従業員“検査を〟
　通勤電車 感染対策は
　議事概要 今後は発言者明記
　米首都で最大規模
　香港広がる“無力感〟
　アーモンドアイ 記録ならず
　(「ニュース 7 」NHK、2020年 6 月 7 日放送、ibid., 49)

(10) “第 3 波と考えていいのでは〟
　東京317人大阪過去最多256人
　女川原発再稼働に地元同意
　世界初「レベル 3 実用化」
　菅首相とあすにも電話会談
　民主派議員が抗議の辞職
　(「ニュース 7 」NHK、2020年11月11日放送、ibid., 49)

テレビニュースにおいても、新聞の見出しと同様、助詞や屈折語尾の省略が行われる場合がある。そのような省略は、新聞の見出しと同じように、限られた文字数で内容を表すことが目的

であるかもしれない。しかし、テレビニュースの見出し項目では、助詞や屈折語尾以外の様々な要素が省略されている言語表現が含まれている。例えば、(9) の「米首都で最大規模」という表現においては、何が「最大規模」なのかが省略されている。また、(10) の「菅首相とあすにも電話会談」は「だれが」という情報が省略されている。これらは、どのような情報かを理解するために必須の要素の省略である。

新聞の見出しにおける省略は、記事の内容を限られた文字数で簡潔に伝えることを目的とするが、情報の理解に必須の要素の省略は通常行われない。テレビニュースに見られる、情報の理解に必須の要素の省略は、限られた文字数で内容を表すという以外の目的があると考えられ、新聞の見出しとは明らかに異なる。

上に挙げた例は、一見して必須の要素の省略があることが分かるような例である。これに対し、最近出現した例の中に、一見重要な省略があることが分からないが、実は重要な要素の省略が含まれている、というものがある。

(11) 運転手不足で赤字鉄道存続へ　　(「おはよう日本」NHK、2023年 8 月26日放送)

多くの人は、この見出しを見て、訳が分からなくなるだろう。運転手不足で赤字鉄道廃止へ、なら分かるが、「運転手不足で赤字鉄道存続へ」とはどういうことか。

この後続くニュースの内容は要約すると次のようなものである。石川県の北陸鉄道石川線が赤字であることから、バスへの転換が議論されたが、バス運転手の不足が影響して、鉄道のまま存続することになった。この内容が、先の見出しになっているのである。「バス運転手不足で鉄道からバスへの転換ができず赤字鉄道が存続へ向かうことになった」の下線部が省かれている。この見出しは、内容を理解するための重要な要素が省かれていることになる。この下線部のうち「バス」を省略しないで「バス運転手」とするだけでも相当理解しやすくなるが、「バス」という語が省かれているため、「運転手」は「鉄道の運転手」と解釈されることになり、結果として、理解が非常に困難な見出しとなってしまう。

このような見出しは、新聞の見出しとは明らかに異なる。新聞の見出しは、スペースの問題から、少ない語数でもできる限り重要な要素を入れ理解できるように考案されている。一方上のような見出しは、重要な要素が省かれて非常に難解なものとなっている。この見出しで、「運転手」の前に「バス」を入れるスペースが画面上にないようには見えないので、スペースの問題で省かれているわけではないと考えられる。

このような例は、ニュースの娯楽番組化として要点後置が行われていることを示している。(11) の見出しを見て、多くの人は混乱すると考えられることから、これは、クイズあるいは謎かけのような効果を狙った見出しであると考えられる。ニュース番組でありながら、一時的

にしろ、誤解をさせる、理解を難しくさせる、ということを目指しているように見える。

3.2 複数人による発話

ニュース番組の多くで、複数人でニュース項目を扱う、という現象が観察される。これには、複数人でニュース項目を紹介する、という場合と、ニュース項目の最後に会話を行う、という場合がある。このような現象は、かなり前から見られるようになっており、現在は当たり前のように行われている。

村松（2005）は、ニュース番組のキャスター同士の会話を分析しているが、対象としたキャスター同士の会話のほとんどすべてが、放送されたニュース・話題に関連していたとしている。（村松 2005: 7）

そのような例を（12）に挙げる。これは、「寒中みそぎ」に関するニュースで出現した例で、男性アナウンサーの発話である。

（12）こちらは〇〇さん（女性アナウンサーの名前）に是非やってもらいたい。

（「ニュース７」NHK、2017年12月31日放送）

（12）は、アナウンサー同士が会話を行い、かつ放送されたニュース・話題に関連して会話を行っている例である。ニュースの話題に関して、アナウンサーが個人名を使って他のアナウンサーに話している。このような形式をとっているニュースは、英語圏ではほとんど見られず、村松（2005: 7）によれば、アメリカのニュース番組とは大きく異なる点である。

このように、現在のニュースにおいては、複数人でニュース項目を紹介したり、会話をしたりするという現象がみられる。これらは、総合すると、「発話を複数人に分ける」という現象だと言える。伝統的には、ニュースとは一人の担当者（キャスター、アナウンサーなど）がカメラに向かって話す、という形式であったが、現状では、そのような形式をとるのは定時ニュースのみである。

この、「発話を複数人に分ける」という現象は、ニュースを娯楽番組化する手法の一つと言える。一人でカメラに向かって話すという手法は、従来ニュースの独特の形式である。他にテレビでそのような形式をとる可能性があるのは、授業形式の講座（高校講座や放送大学など）くらいであろう。

これに対し、娯楽番組のほとんどは、バラエティーやドラマなど、複数人が発話を行っている。ニュースにおいて発話を複数人に分けるということは、ニュースを娯楽番組化する手法の一つである。つまり、一人の担当者（キャスター、アナウンサーなど）がカメラに向かって話す、という従来ニュースで取られていた独特の形式を、ニュース番組のほとんどが放棄して、娯楽

的な番組のやり方にシフトした、ということになる。

このように考えると、2節で言及したワイプという手法も、発話を複数人に分けるということに関係したものととらえられる。例えば、屋外からの中継などで、現地にいる記者のみが語れば一人による発話になる。これに対し、スタジオにいる出演者が小さく画面に入れば、複数人が画面に存在することになる。小さく映る出演者は、顔を出すだけでなく感想を述べたり、あいづちを打ったりという形をとることが多く、その結果、従来は現地の記者のみの発話だったものが、複数人に分けられることになる。これが非常に広く行われている。

この「発話を複数人に分ける」という現象がさらに進んだ例がある。ニュース７（NHK、2019年５月30日放送）では、オリンピックのチケット販売を装ったフィッシングのニュースで、アナウンサー同士で芝居をする、という現象が観察された。この例で、「発話を複数人に分ける」という現象が、ニュースをドラマのように娯楽番組化する手法であることがさらに示されていると言える。

このように、現在のニュースでは、会話をするなどの娯楽番組的な手法を取っている。この点で、一点補足しておく。通常の会話では、表情も重要な伝達手段の一部となる。一方、ニュースにおいても、ニュースの内容によって表情を変えているように見えるという現象がある。この点については、次節でさらに扱う。

４．なぜ娯楽番組化するのか

ニュース番組で娯楽番組の手法を取り入れることの目的とされているのは何だろうか。この点に関し、いくつかの手がかりがある。

このことを示すものとして、まず、ジャニーズ事務所[6)]に所属する東山紀之氏の記者会見での発言を見てみよう。2023年、BBCのドキュメンタリーをきっかけにして、ジャニーズ事務所の問題が大きく取り上げられるようになったが、その件に関する記者会見で、ニュース番組でタレントのキャスターが起用されていることに関しての質問が出た。これは、ジャニーズ事務所の所属タレントの中に、民間放送局のニュース番組に出演している人が複数人いるためである。東山氏が、ニュース番組でタレントのキャスターが起用されていることに関し、どのように発言したかに関する記事を以下に挙げる[7)]。

> 続けて、記者が「（先ほどの質問に）これに関連して、ジャニーズのタレントがキャスターとしてニュースや報道番組に出演することについて、おそらく考えてこられたと思うので、そこについても考えをお聞かせください」と質問した。
>
> 東山氏はこの記者会見で、９月３日の放送をもってキャスターを務めていたテレビ朝日の

『サンデーLIVE!!』を降板したことを合わせて発表。新社長就任に伴う対応だったと明かしていた。同氏は、ジャニーズ事務所の所属タレントの年長者として、キャスターの仕事もこなしてきた。
東山氏は質問に対し、「今、若い人たちの80%くらいはニュースを見ない」と切り出し、次のように考えを述べた。
「新聞も読む人は少なくなっている、雑誌も読む人は少なくなっている、そういった中で、やはり僕らがやる（出演する）ことによって、少しでも政治であるとか、世の中のことを分かってもらうことが一番の近道なのかなという思いも非常に強くありまして、キャスターのお仕事を頂いた時にやることにしたわけです」

東山氏の答えは、ニュースにタレントが出ることに関するものだが、これは、ニュースの娯楽番組化全体に関しても、その理由を推測する助けとなる。すなわち、ニュースを親しみやすくしてより多くの人に見てもらうため、というのが、おそらく表向きの目的だと考えられる。

一方、ニュースと娯楽番組との関係については、一定の基準がある。小泉（1998）が述べるように、アメリカ CBS のニュース・スタンダード[8)]では、ニュース番組と娯楽番組は明確に区別するべきものとされている。

最も重要なことは、事実を扱うわれわれの報道とフィクションやドラマを扱う娯楽番組との間に、可能な限り鋭い線・・・を引くことである、という点だ。というのは、ニュースも娯楽番組も、すべて同じブラウン管の、同じチャンネルから、ひとつの時間の流れに沿って切れ目なく流れ出ており、そしてまた放送ジャーナリズムではページを繰ることもできなければ、必要な箇所に下線を引くこともできないからである。それゆえに、われわれがショービジネスをやっているのではないと自負することは、特に重要であり、したがってドラマチックで自由な表現、「事実を反映したフィクション」といった論理、それに話し方による強調の仕方といった、フィクションや娯楽番組では当然のように使われる手法を、絶対に駆使してはならないのである。

（小泉 1998: 9 ）

ここに示されているような、ニュースに娯楽を持ち込まないように、というのは、多くの国の基準となっている。

これに対し、日本のニュースはどうか。このことについて、まず、TBS の番組「報道特集」に出た発言を見てみよう。（TBS「報道特集　事務所とテレビ局の関係は」2023年10月 7 日放送）上に挙げたジャニーズ事務所の問題では、「メディアの沈黙」が問題となっているが、こ

の番組では、TBSの社員など80人以上に取材し、ジャニーズ事務所とTBSの関係について検証したとしている。この番組の中に、社員（「制作担当者」）の次のようなことばが紹介されている。

報道機関とエンターテインメントを両方担うというのが、大きな矛盾を抱えている

このことばから、次のような考え方があることが推測できる。報道（ニュース）とエンターテインメントは区別しなければならない。しかし、同じ放送局が両方を担っていることから、区別しなければならないものが混ざる、あるいは影響し合うことが生じてしまう可能性がある。これは本来あってはならないことである。

このように、日本においても、本来はニュースと娯楽は区別するべきもの、と考えられていることが分かる。

一方、次の新聞記事からは、ニュースに関するNHKの基準及び実際の考え方を推測することができる。この記事は、NHKニュースが2017年度より刷新された際、担当アナウンサーに対して行われたインタビューの記事である[9)]。

―ニュースを読む仕事の魅力は。

鈴木　情報は記者やデイレクターが現場を取材し、編集されて色んな人の手を経てアナウンサーの元に届く。それに怒ったり悲しんだりという感情みたいなものが乗って、ニュースになっていく。そこにやりがいを感じます。

―感情や思いがなければ、AI（人工知能）がやればいい？

桑子　AIが情報を届けることはできても、心を乗せて伝えられるのは人間だと思います。

この記事で、2つの点に注目できる。1つは、ニュースを読む際「感情みたいなものが乗って」「心を乗せて」行う、という表現を用いていることである。これらはあまり一般的な表現ではなく、通常は「感情をこめてニュースを読む」と言うところであろう。にもかかわらず、「感情をこめてニュースを読む」とは言っていないことから、ニュースに感情を入れるということはよくないという基準はあるようだ、ということが推測できる。これと関連して、2つ目の注目点として、「感情みたいなものが乗って」「心を乗せて」という表現が、望ましいこととして使われている（「そこにやりがいを感じます」）ということである。これは非常に微妙な表現である。ここから、ニュースに感情を入れるということはよくないという基準はありつつも、それにもかかわらず必ずしも悪いことではない、という一見矛盾したような考え方が見て取れる。

この記事から、ニュースを伝える際の「表情」についても分かる。前節で述べたように、現

在のニュースでは、ニュースの内容によって表情を変えているように見えるという現象がある。これは、上に述べられているような考え方に基づくものと考えられる。実際に、同じ記事の他の箇所で、次のように述べられている。「悲しいニュースから少し明るいニュースに移る時、言葉を発さなくても表情で切り替えることができるのがアナウンサー。」ここから、意図的に表情を変えているようだということが分かる。

この節では、ニュースを娯楽番組化する目的について考えた。国際的には、ニュースと娯楽番組は明確に区別するべきものとされている。日本のニュースでも、そのような基準はあると考えられるものの、その一方で、ニュースで娯楽番組的手法を取る強い傾向がある。その目的は、ニュースを親しみやすくしてみてもらう、感情をできるだけ入れて人間的に伝える、などであると考えられる。

次の節では、ニュースを娯楽番組化することの問題点について、主に言語や情報伝達に関連した点から示す。

5．ニュースの娯楽化の問題点

先に述べたように、アメリカ CBS のニュース・スタンダードなどでは、ニュース番組と娯楽番組は明確に区別するべきものとしている。それには理由があるわけだが、本稿では、主に言語や情報伝達に関連した点から、ニュースの娯楽化にはどのような問題があるのか示したい。

まず、ニュースに必要な速報性の点に関連した問題がある。ニュースでは、できるだけ速く正確に情報を伝えることが求められる。これが「ニュース」ということばのもともとの意味であろう。災害に関する報道はその典型である。一方、娯楽番組的手法である要点後置（重要な点を後に述べること）を使うことは、重要な情報を伝えるのが後に回るということを意味する。これは、ニュースに必要な速報性とは矛盾する。本来なら正しい情報を１分でも１秒でも早く、と努めなければならないところを、正しい情報はできるだけ後に、とするとしたら、これは「ニュース」の要請に反している。

要点を後に回しても、最終的に正しい情報を伝えればよい、という考え方かもしれないが、正しい情報を伝えるのが時間的に遅くなる、というのは一般的に伝達の手段として適切か、という疑問がある。これは情報化社会の要請に反している。しかも、現在、緊急に正しい情報を伝えなければならない事態が増えており、要点後置という伝達方法が主流になることには危惧が生じる。情報伝達をクイズ的にして人の注意を引く、ということは、緊急に正しい情報を伝えるという要請とは矛盾する。

次に、「複数人で発話を分ける」という娯楽番組的手法が、重要な情報を短時間で伝える際に効果的か、という点について考えてみよう。ドラマなどの場合は、様々な趣向を凝らして、

じっくり時間をかけて伝えたい内容（テーマやメッセージなど）を伝えるという手法である。これに対し、ニュースは短い時間で重要な情報を伝えるものである。（ニュースとドラマとはそもそも伝えたい内容が異なるが、それは別の問題とする。）複数人で発話を分けると、視聴者が注意を向ける対象が散ることになる。「散漫」という語が示すように、これは重要な情報を伝えるのに効果的な方法とは言えない。つまり、複数人で発話を分けることは、重要な情報を短時間で伝えるニュースの性質にはそぐわない、ということになる。現に、世界的に見ると、このような手法をニュースでとっている例はあまりない。

さらに、ニュースで娯楽番組的手法を用いることは、間違ったメッセージを伝える可能性がある。これは、正確に情報を伝えるという大切な目的に反している。（11）のような例はそのようなものであり、一時的にしろ誤解を生む可能性がある。さらに言えば、誤解されることを期待しているようにも見える。

加えて、表情などで伝えたメッセージが、間違っていたことが後に分かる可能性もある。4節で述べたように、近年のニュースは「うれしいニュース」はうれしそうに、「悲しいニュース」は悲しそうに伝えるということを目指しているように見える。4節で挙げた、アナウンサーへのインタビュー記事にも、次のような部分がある。「悲しいニュースから少し明るいニュースに移る時、言葉を発さなくても表情で切り替えることができるのがアナウンサー。」しかし、それには、あるニュースが「悲しいニュース」か「明るいニュース」かを、伝える側が判断することが必要になってくる。つまり、ニュースに主観を入れることになる。このことの是非は別としても、「悲しいニュース」か「明るいニュース」か、を区別することは簡単ではない。「明るいニュース」と思っていたものが、実はそうではなかった、ということが後で分かる場合もある。例えば、画期的な発見と思われたものが、実は捏造であったと後に分かった、というような事例もある。

もちろん、正確であることに努めても、間違った情報を伝えてしまう可能性はゼロではない。言語表現として伝えた情報が万一後に間違いであることが分かった場合は、言語によって訂正ができる。これに対し、表情で伝えたメッセージが後に間違いであることが分かった場合は、訂正のしようがない。そういう可能性を考えると、感情を入れず表情や声の調子もできるだけ中立的にニュースを伝える、という従来の方法は、適切なものであることが分かる。

ニュースで扱う話題が持つ性質が、状況の変化とともに変わる場合もある。気象に関するニュースは、そのような例である。一般的な会話でも従来、時候に関する話題が無難な話題、とされていたように、天候や季節に関する話題は、どちらかと言えば楽しい話題であった。このことを示すように、多くのニュース番組では、天気予報のコーナーで特に娯楽的な要素が強くなっている。芝居のような小道具を使ったり、着ぐるみの動物のキャラクターが出てきたり、クイズを行ったりしている。天気予報のコーナーが娯楽的な要素を持つのはかなり以前からで、

例えば、上で言及した「ニュースセンター９時」（NHK、1974年４月１日放送）では、天気予報のコーナーを扱う女性が、娯楽番組のような特殊な服装をしているのが観察される。ニュースの中でも、天気予報のコーナーは楽しく伝えられるものだと以前から考えられていたのであろう[10)]。

しかし、状況が変わり、今日、気象に関する話題は、非常に深刻なものになっている。台風や豪雨などの自然災害は言うまでもないが、夏の暑さに関しても歴史上見られなかったほどの「猛暑」となっている[11)]。暑さによる救急搬送や死者まで出ており、「災害級」と描写されることもある。これに対し、気象に関する話題、例えば「暑い」という話題に関して、ニュースの出演者が笑っているのを目にすることがある。これは上に述べたような、表情を伴ってニュースを伝えるというやり方で、気候に関する話題は楽しい話題という考え方に基づいていると思われるが、現在の気象の状況から見ると違和感のあるものとなっている[12)]。このような点からみても、感情を入れず表情や声の調子もできるだけ中立的にニュースを伝える、という従来の方法は、適切なものであると言える。

このように、ニュースに娯楽番組的手法を用いることは、言語や情報伝達の観点から見ても問題があることが分かる。４節で述べたように、ニュースを親しみやすくして多くの人に見てもらう、という目的があったとしても、ニュースの速報性や正確性が影響を受けるとすれば、そのような手法が適切かどうかには疑問が生じることになる。

ここで、ニュースを伝える際に感情を入れることに関する、人間と AI の相違について述べておきたい。４節で述べたインタビュー記事では、人間がニュースを伝える意味として、「感情や思いがなければ、AI（人工知能）がやればいい？」「AI が情報を届けることはできても、心を乗せて伝えられるのは人間だと思います。」という記述があった。ここには、感情を入れなければ AI と変わらないという考え方が示されているように思われる。この記事は2017年のものであるが、現在、感情的に伝えられるかどうか、という点で AI が人間と異なる、という状況は変化している。AI 自体は感情というものを持っていないとしても、感情を持っているかのように伝えることはでき、作成者の意図通りの感情を入れたように話させることができる。このことを示すものとして、AI に歌を歌わせたり声優の真似をさせたりすることができるようになっている。人気声優そっくりの話し方を AI にさせることの著作権上の問題を指摘した記事もある[13)]。ここで注目できるのは、著作権上問題となるほど AI が声優の真似ができる、すなわち感情を入れたような話し方ができるようになっている、ということである。

それで、話し方に感情を入れられるかどうかが人間と AI の違いという状況は変化していることが分かる。AI も感情を入れた話し方ができるようになっている。もちろん、感情を入れていないように話すこともできるが、それは作成者の意図によるのであって、AI が意志をもって何が正しいかを判断してやっているわけではない。一方人間は、ニュースはどうあるべきか、

という考えに基づいて伝え方を決める。例えば、ニュースは中立的に伝えるべき、という基準に従わなければならないという考えがあるとすれば、それに従って伝えることができる。ニュースはどうあるべきか、に従うという意志をもって伝えるということが、AI でなく人間でなければできないことである。

6．結論

本稿は、メディアで使用される言語の特徴について考察した。今日のメディアで使用される言語には、要点後置、および発話を複数人に分けるという特徴がある。本稿では、これらの特徴が、ニュース番組の娯楽化によって引き起こされているということを主張した。また、ニュースに要求される速報性や正確性の観点から見て、このような言語の手法の使用には問題があることを指摘した。

ニュース番組を取り巻く社会状況は、刻々と変化している。国際的にも国内的にも、重要な出来事が次々と生じており、情報源としてのニュースの重要性はますます高まっていくと考えられる。今後、ニュースの娯楽番組化とそれによって引き起こされる言語現象がどのように推移するのか、継続的な観察が必要である。

註

1）本稿で扱うニュース番組は、主にNHKで放送されたもので、民間放送局のものも含む。ニュースを放送するプログラムを指して「ニュース番組」という表現が一般的に使われている。一方、NHK の分類では、放送するプログラム全体を、「ニュース」とそれ以外のプログラムである「番組」に二分している。つまり、「ニュース」以外のプログラムが「番組」である。この分類に従えば、「ニュース番組」という表現は公式にはないことになる。本稿では、「番組」という語を「テレビで放送されるプログラム」という一般的な意味で用い、ニュースを扱っているプログラムを「ニュース番組」と呼ぶことにする。

2）Eテレは、教育テレビが、2011年６月１日から名称変更したものである。（「NHK教育テレビ、６月から「Eテレ」に名称変更」日本経済新聞、https://www.nikkei.com/article/DGXNASDG2704O_X20C11A5CR8000/、2011年５月27日、2023年10月11日アクセス。）

3）註２にあるように、NHKEテレは、元はNHK教育テレビであり、番組は教育的な側面を持ったものであると考えられるが、「ワルイコあつまれ」はドキュメンタリーや語学番組などとは言えないことから、ここではニュースに対する娯楽番組として扱う。

4）（2）は、テレビで放送されたニュースがインターネットに上げられたものをもとにしているが、2023年10月29日現在では、見られなくなっている。このように、テレビ番組を放送後に確認することが困

難な状況は、以前から続いている（中 2008: 26）。テレビ番組を体系的にデータベース化する必要性が指摘されているが（小林 2009: 5-7）、テレビ番組を放送後に見ることは、依然として困難な状況のままである。轟（2023: 97-99）はこの点について論じている。

5）（6）では、分裂文の途中に映像と音声が挿入されている。このように、音声言語と映像を組み合わせることがニュースでしばしば行われる。ここでは、これが下線部をさらに後ろに動かす効果を持っている。なお（6）は映像を除いても言語表現として成り立つが、中には、音声言語が必須要素を欠いており、その欠けた部分を映像で補うという手法がとられる場合もある。（轟 2014: 88）

6）「ジャニーズ事務所」は2023年10月17日に社名を変更した。（「ジャニーズ事務所 社名を『ＳＭＩＬＥ－ＵＰ.』に変更」https://www3.nhk.or.jp/shutoken-news/20231017/1000098249.html」NHK、2023年10月17日、2023年10月25日アクセス）本論文では、引用した記事現在の社名「ジャニーズ事務所」を用いて言及することとする。

7）橋本明乃「『弊害も勿論あった』。それでもジャニーズタレントが報道番組で『キャスター』をやる意義は？⇨東山紀之さんはどう答えたか」https://www.huffingtonpost.jp/entry/story_jp_64fa7e85e4b0e2b6718e96d6、2023年９月８日更新、2023年10月２日アクセス。
この記者会見は、長時間にわたって生中継された。

8）「1976年に公表され、その後改訂や増補が行われてきた。」（小泉 1998: 5）

9）「ＮＨＫ報道の春、私たちから新風　桑子真帆アナウンサー×鈴木奈穂子アナウンサー」朝日新聞2017年３月25日夕刊４面、朝日新聞クロスサーチ、2023年10月21日アクセス。轟（2018: 452）は、この記事を、人の心を打つような文章が良い文章であると考える傾向と関連したものとして論じている。

10）「ニュースセンター９時」は、加藤（2012: 102）によれば、当時のニュース番組としては画期的な番組として登場したものであった。註4で指摘したようなデータベースへのアクセスの問題があるため、それ以前のニュース番組を確認できていないが、「ニュースセンター９時」が画期的なニュース番組とみなされていることから、天気予報担当者の服装も、それ以前にはあまりなかったものなのかもしれない。

11）竹山栄太郎「2023年７月は「史上最も暑い月」 国連事務総長「地球沸騰の時代が来た」」https://www.asahi.com/sdgs/article/14969821、2023年７月31日、2023年10月22日アクセス。

12）現在の気象状況に関し、人類の存続に関わるとして警鐘を鳴らす専門家もいる。（香取啓介「氷床崩壊→海流停止→森林枯死　気候変動、迫る「ドミノ倒し」の危機」朝日新聞デジタル、https://www.asahi.com/articles/ASQ4H3RPBQ3ZULBJ018.html、2022年４月16日、2023年10月22日アクセス。）

13）「コナン君に『#歌わせてみた』流行曲、実はＡＩ偽音声…困惑する声優たち『対処しようがない』」読売新聞オンライン、https://www.yomiuri.co.jp/national/20230926-OYT1T50040/、2023年９月26日、2023年10月22日アクセス。

参考文献

橋本明乃「『弊害も勿論あった』。それでもジャニーズタレントが報道番組で『キャスター』をやる意義は？⇨東山紀之さんはどう答えたか」
https://www.huffingtonpost.jp/entry/story_jp_64fa7e85e4b0e2b6718e96d6、2023年９月８日更新、2023年10月２日アクセス。

林香里（2002）『マスメディアの周縁、ジャーナリズムの核心』新曜社。

加来由子（2007）「午後のワイドショーが消える？　東京のＴＶ番組事情一変　視聴者減り関心も多様化」朝日新聞2007年９月19日朝刊25面、朝日新聞クロスサーチ、2023年12月13日アクセス。

香取啓介「氷床崩壊→海流停止→森林枯死　気候変動、迫る「ドミノ倒し」の危機」朝日新聞デジタル、https://www.asahi.com/articles/ASQ4H3RPBQ3ZULBJ018.html、2022年４月16日、2023年10月22日アクセス。

加藤昌男（2012）『テレビの日本語』岩波書店。

小林直毅（2009）「メディア／アーカイブ研究の展開へ向けて」日本マス・コミュニケーション学会編『マス・コミュニケーション研究』75、学文社、3-14。

小泉哲郎（1998）『テレビジャーナリズムの作法――米英のニュース基準を読む』花伝社。

村松賢一（2005）「ニュース番組における『おしゃべり』」三宅和子、岡本能里子、佐藤彰編『メディアとことば２』ひつじ書房、2-29。

中正樹（2008）「内容分析のすすめ――実証することの大切さ」小玉美意子編『テレビニュースの解剖学――映像時代のメディア・リテラシー』新曜社、26-37。

高見健一（1999）「統語論　機能主義」西光義弘編『日英語対照による英語学概論』くろしお出版、137-183。

竹山栄太郎「2023年７月は「史上最も暑い月」 国連事務総長「地球沸騰の時代が来た」」https://www.asahi.com/sdgs/article/14969821、2023年７月31日、2023年10月22日アクセス。

轟 里香（2014）「テレビニュースにおける言語現象について」『北陸大学紀要』第38号、81-97。

轟 里香（2015）「ニュースで使用される言語における要点の移動について」『北陸大学紀要』第40号、41-53。

轟 里香（2018）「テレビニュースの言語に見られる現象―その要因と背景―」『ことばのパースペクティヴ』、開拓社、442-453。

轟 里香（2020）「ニュースの文字言語における要点の省略について」『北陸大学紀要』第50号、47-65。

轟 里香（2023）「メディアの言語における強調的表現」『関西外国語大学 研究論集』第117号、95-108。

（とどろき・りか　外国語学部教授）